

忠臣後日嘯

忠臣後日嘯

地雲無心にして岫より出るとかや。雲州鹽冶家の舊臣。大星由良之助良金同苗力彌。其外四十餘人の義士。怨敵師直が館へ取かけ。思ひの儘に仇を復し。菩提所光明寺に引取て。首級を手向焼香も。列嚴重にフシ執行ひ。フシ皆客殿に居流れて。前夜の勞を晴させんと。山門に酒を許し。院主の馳走答拜も。二字を尊む忠臣のフシ響と。こそは知られたり。地良金座席を見廻して。詞ナニ富堀殿大驚殿。貴殿方には兼てより。俳諧を好るゝと承はり及んだが。今朝途中の御發句は時に取ての御秀逸。ア、面白ふ承はる。拙者も下手の横好と。折々吐ても見ますが。何とし及ばぬ。ア何とやらでござつたの。御苦勞なれ共今一應。吟じてお聞せなされぬか。死後迄の後學ぞと。地望かけられ兩人は。詞コハ大星殿御挨拶。御覽も恥入候へ共。只有體を申した計。御添削下さるべしと。地認め持し兩陰を。フシ扇子に乘せて差置ば。地押戴いて。手に取上。詞寒鳥の。身はむしろるゝ行衛かな。地又こなたはと押抜き。詞山を抜く力も折て松の雪。ハア、何れをいづれと申されぬ當意即妙。甚感心仕る。ヤイゝ力彌。夕部に道を聞て。朝に死す共可なりとは。聖賢の詞。汝も後學仕れと。地父が詞にすり寄て。詞若輩の私。存ぜざる事ながら。面白ふに存じます。苦しからずば兩詠共。地下されかしと挨拶も。フシ育柄こそ奥床し。地折から寺僧走り出。詞藥師寺治郎左衛門殿。上使と有て御出と。地詞も未終らぬ内。頗も心も憎てい作り。並居る諸士に禮義もせず。フシ上座へ通りフシ肘張かけ。詞ヤア鹽冶崩れの主なし共。謹て承はれ。當時國家の政道を主る。師直公を討取る條言箒道斷。又。故有て預置れし天國の短刀。前夜の騒動にて紛失。畢竟敵討は附たり。盜賊同然の所爲なりと。殿中にて評定極り。残らず召捕禁獄させよと。以の外の嚴命なれど。ア夫も不便な事。爰は拙者が了簡にて。切腹申付

る間。サア尋常じゆんじやうに腹を切れ。サア腹々々地と詰つ掛かて。フシ家來も庭に取巻とくまたり。詞ヤア／＼藥師寺りやくしじ殿どの暫しばくと。地詞ちことをか
けて打通うちとる。桃の井い若狭わが之助のすけ保明やすあき。仁義じんぎを守る弓取ゆみとりの。フシ故實こじつを正ただす上使しやうしの式禮しきらい。上座じやうざへ通とれば一同いどうフシに諸士しよし
も。頭かぶを下くだにける。詞イヤ何藥師寺なんりやくしじ殿どの。此桃このの井いへ仰付おほつけられし義士ぎしの御預おんよ。直義公ちやうぎこうの仰おほせを背そむき。拔ひがけして先へ廻まわり。
やらぬ通のがさぬとおいやるは。エ、聞きへに。亡ほろびても師直しちくへ。例のお髭ひげの廳取ちりとり待まち。そふ味あじふは得致とくちすまい。察さつする所
討死うしに共とも。行衛ぎやうゑしれざる師泰しやうたが彼か。天國あまのくにを取隠とし。渠等かれらに汚名をなめを打うちかぶせ。此場このばで切腹せつぷくさす分別しつべん。ヘテよふ出來た貴殿きでん
の御作意ごさうい。夫は鬼も有あれ拙者せつしやが役目やくめ。餘人よじんにさせては武士道立ぶしだうたてす。定めて覺悟かくごも有あつらんサア地拔ぢはな放はなせ藥師寺りやくしじと。反
打うかけて詰つ寄よれば。詞ア、これ／＼桃の井い殿どの。去迎きようぎやうは短氣たんき千萬せんまん。全まくそふした心でない。と申まをすは。貴前きぜんの妹御めいご
千種ちしゆ殿どのを。兼て拙者せつしやが婦妻ふさいにと。直義公ちやうぎこうへも願ねがふて置おたりや。其元そのもとは兄舅けいきう。親同然しんどうぜんに存ぞんるから。此度このたびの御大役ごたいやく。何なんが
な手助てすけけ致いたさふと。申まをさば貴殿きでんへ孝行かうぎやうぶり。コレサ是兄舅公けいきうこう。まつびら此事このこと。御沙汰ごさたなしに。サア御容赦ごようじやに預よりたい。
ム、然しからば拙者せつしやをおかばひ有あて。成程なりほど左様さやう。ハテ扱入さくしらざる御深切ごしんせつとフシ苦笑がくわうひ。地差控ぢさうがへたる大星おほほしは。桃の井いに打
向むかひ。詞拙者せつしやを初はめ徒黨とどの者。亡主なきぬしが仇あだを討取うちとて。最早もはや此世このよに念慮ねんりよもなければ。地碑前ぢひぜんの殉死しゆんし御赦免ごじやめんと。思おもひ入いてぞ
願ねがひける。詞ホヲ、尤もつとの願ねがひなれ共とも。最前さいぜんより聞きるゝ通とり。天國あまのくにの短刀折惡たんたうせつあく敷粉ふこな失故しつこ。右詮議みぎせんぎ落着迄おちつき迄。某方それがたへお
預あづかり付つけられたれば。心置こころをなく滞留たいりう有あ。地用事ぢようじも有あらば家來迄何時なんども承うけはらん。かゝる冥加みやがの侍さむらいを預より歸かへる身みの面
目めんもく。末代迄まつだいの家名いへなの譽ほれ。イザフシ同道どうだうと。夕附日ゆふづき。顔に照添てりそふ藥師寺りやくしじは。面目灰めんげはに紛まじれ武士ぶし。三國無双さんごくむしやうの忠臣ちゆうしんを。
預あづかり歸かへる桃の井いは實じつに優才いゆうさいの家柄いへがらや。義士ぎしの譽ほれは萬天まんてんに星ひかの光ひかりも。赫々かくかくと眠ねりの夢ゆめは覺さめにけり。地石部草津ぢせくぶくさづを。
横田川よこたがわ。通とりも稀まれな子の刻過くくわ。渡わたり舟ふねさへ寢入端ねいりはな。頃ほどしも臘月ろうげつ未なつた。フシ四方しやうはの雪風ゆきかぜとふ／＼と風かぜが。風吹かぜふく風玉かぜたま
に。吹倒ふたふすかと涉わたし番ばん。フシ菰引廻こもひまはす要害えうがいも。地吹破ぢふきやられて冷上ひやがり。ふつと目覺めさす渡わたし守まも。筵劔退じやんけんたいかけ出いしが。詞ホ
イ今いまは夢ゆめで有あたよな。所は鎌倉かまくらの光明寺くわうみやうじ。鹽冶家しんじけの忠臣達ちゆうしんだ。敵師直たきしちく討取うちとて靈前れいぜんに首くびを手向たむけ。客殿きやくでんに休息ききよくの所ところへ。藥師

寺めが無實の難題。夫に引かへ桃の井様。右詮議落着迄。義士の面々預かると。花も實も有る取捌ぎ。エ、其跡はどふて有ふぞ。あつたら夢を破つた事。是といふも天川や義平殿。此杵入が心を見込。買物萬事の相談相手。敵討の濟迄は態と住所も定めずに。日雇賃搦渡し守。いろ／＼に姿をやつすも。どふぞ此事隠密に。義士に本望遂さしたいと地思ふ一途の空夢か。何にもせよ能吉左右。エ、正夢で有てくれかしと。天を拜して忙然と。瑞夢を願ふ其所へ。石部の方から韋駄天走り。小番／＼と呼かけて。間近く飛くる挑燈の。フシ矢よりも早く飛乗る船。詞エ、どめつそふなお侍。船の底が抜ますはいの。ヲ、是は無調法。餘まり急な御用だから。思はず知ず今のどつさり。サア／＼早ふやつてくれろさ。アイやるはやりやんしよが。私も今迄一寢入。目覺しに一ぶく飲たい。がお前も急ぐと言んす程に向ひ迄着内に火を打て貸て下んせ。イヤ打いても此挑燈。ハテ扱。此をら風に挑燈疊むと灯が消ると。地械つ／＼フシばつて押出せば。地夫もそふかと船梁に。腰打かけて銃射搜し。ほくちが切たと懐中の。紙入出して用意の袋。取出す拍子落した物。知でかちフシ／＼火を移し啞へ煙管の船頭が。詞ナント親方。きつふ急ぎのお飛脚をふなが。何ぞ又鎌倉に變つた事でも有たかいと。地うら間かゝる着かゝる、ソレぐはつたりじやといふ中に。飛上つたる侍は。過分とフシいふてかけ出す。詞エ、行は／＼。テモ扱も早い足。ホンノ蜘蛛の子散す様な。コレハしたり。吸がらを飛して退けた。爰て我等が嗜の。大坂天満天神の御社内明珍が火燈。バタクリ／＼／＼地舟底に。屈んで打たる石の火に。光るは何じやと拾ひ上。見れば覺の金の短冊。星の光りに透しても。字性臚に讀兼るを。火皿につき付讀下せば。詞雲州鹽冶の家士。寺岡平右衛門。裏はいろはの合印。そんなら今の侍が寺岡殿で有たかい。地何でもばつ付様子をと足に。任せて。三重行空の。風雅でもなく。洒落でもなく。しやう事なしの山科と世に諷はれし浪人の。奉公持と披露して。鎌倉下向の留住住居敵に歌賀の正月拵へ。妻のお石に引添ふて嫁の小浪もかいしよげに。櫛前垂引しめて。仕馴ぬ業も姑の。詞をもちゐるの鏡餅。雜煮の溫氣取並べ。跡は餅花咲柳。フシ家内嚙き賑はへり。詞イヤ

なふ小浪。閑しさに取紛れて。戸難瀬様の御隠居所へ。使上るをとんと忘れた。りんでも早ふやつてたも。アイか、様も最前からお出成れて勝手の手傳ひ。私が初めての正月。馴子舞と望まれても。あられもないそんな事と。爰へ廻て参じました。其詫言の酒盛かな。相人になつて居やしやんしよと。地言て居る中勝手から。火斗の底銅盥。ちやんくぐはんく。囃子立。馴子舞を見さいなく。地客といふ其名は有れど一家同士。戸難瀬が機嫌。若紫のフシほうろく頭巾。長羽織。梅花鮫取て摺佩。歌舞妓役者のフシ丹前姿。地あづま訃りも相應な。同コレハ都見物左衛門と申者でおりやる。今日は東山の櫻狩。天氣もよければいざ去らば。歌花見しやらば音羽の山よ。瀧の白糸。ぢよんく女郎が彈三味線に。乗てうかれてすんとどつこい。すんとく。ハツハよいかさ。咲たくと餅化に。戯れ寄し品形四十は遙遠山櫻。ながめに飽ぬ風情なり。奴参れ。ナアイく。貫搗の杵入が。紺のだいなし釘ぬき紋。供脇指のいか物作り。紫竹の。杖にあは草履。振出す腕裏紅梅の。ずつと氣條の芳しき男一足端手奴。生蛸摺んでつべいから。かゝとう迄は旦那の物だ。地御用いかゞてごはりまらすでごはりまらすと躊躇ば。地家内がどつと響る聲。お石も興に入めなる小浪獨が笑止がり。同ヲ、かゝさんとした事が。ついに覺へぬ亂れ様。誰が強ふ盛たぞいと。地お石が手前恥らへば。同ヲ、堅。あもつきの御祝義。お定りの馴子舞。そなたの名代を。母の私が勤たのが何とした。谷の細道幾つも見へる。ホ、ホ、面白く。地と酒がほたへる馴子舞はまはひて千鳥足。仁體捨し醉狂ひ。地お石もおかしさ。姫の。貰ひ機嫌の挨拶振。同戸難瀬様のおつしやる通り。夫親子が奉公かせぎ。留守事兼し今日なれば。賑々しいのは先吉左右。年月願ふた有つきも無本望でござりましよと。地ぎもん祝ひし詞の謎。杵八も追従口。同旦那のお首尾もよござりませふが。戸難瀬様の今の所作事。鯉長慶子もそこ退けく。コリヤ杵八股の御挨拶。こなたの奴丹前を。響させふでの壁訴訟。ナアお石様。イヤ又見事でござりました。是は術ない座に堪らぬ。どりや御勝手跡蒸籠。地千歳樂と搦あげて。善哉祝ふて歸りましよと、臺所へて廻て行。地戸難瀬は行儀改めて。

詞心に思はぬ戲言も。聶殿親子の鎌倉下向。敵討と思はさぬ世間への補ひ。御本望を遂られた儘な便りの有迄は。隨分此事をけどられぬのが肝心と。地言にお石も打點頭。詞左様でござります共。敵に油斷さす計略と。地咄し半へいつきせき。旅装束を其儘に入來る足輕平右衛門。斯と見るより懷中より狀箱取出しフシ差置は。詞ヤア寺岡殿。マア挨拶は跡の事。地夫々が自筆狀。封押切て讀中も。詞コレ申し戸難瀬様。彌々噂に違ひもなふ。本望遂たといふ文體。エ、有難い忝ないと。地天を拜し地を禮し悦び勇む二人より。嬉し悲しき露涙。袖に小浪が心根を思ひ遣つゝ寺岡も。フシ差俯いて居たりしが。詞平右衛門めが都歸り委しくお咄し申したけれど。外々の御狀も有る。瑞松院にござなさるゝ後室様への急御用。地心もせければお暇と。フシ急ぎてこそは出て行。地跡フシ打跳め三人は。互に恥て得も言ぬ。心は同じ夫や子の兼て覺悟は聞ながら。過し別れを今生の。別れと思ひ出されて。フシ涙も。同じ涙なり。詞譜代相恩のお主の敵。討課せた人々は嘸悦びでござりませふが。跡に残つた妻子恩愛。いづれ愚も有るまい物。我々計か何ぞの様に。未練そふに何泣事。本望お遂なされたる儘な便り聞上は。世間も何も最う構はぬ。地亡君はじめ義士達へ手向の香花經陀羅尼。詞ヲ、夫々。是程冥加な人々へ。涙こぼすは不吉といふ者。地サア御一所に佛間へと打通て。こそ入にけり。地折から表へ來かゝる侍。麻上下的の糊味もしやしき張返るフシ煩構へ。古傍輩の住家とは知ても知らぬ表向。供の奴がいかつげに誰ぞ頼まふ。頼みませうといふ聲に。釋はづして飛で出る。昔の奏者今のりん。どうれといふもフシつかふどなる。詞フ、ム大星殿のお宅は是じやな。主人薬師寺殿よりお使者。御存じの進道源四郎。お石殿へ直談と申通じておくりやれと。地聞分がたき口上を。こまつた顔でフシ奥に入る。取散す物片付させ。加古川が後家戸難瀬は出迎ひ。詞お使者お通り下されませと。地詞についてのつし。フシ上座へ通る顔形。憎さも憎しと詞にかど。詞主由良之助が女房嶽。在宿は致せ共。お使者のお名が氣に入ぬ。進道源四郎殿といふ。未練不忠の大侍。同席するは其身の穢れ。幸ひ参り合せたる。姫の此戸難瀬。よきにあしらひばつ歸せと。頼まれての此時宜。サア

口上を承はらふと。地ずつかり言れてさしもの進道。眞面目になれど痿まぬ高聲。詞ヤア奇怪なるお石が行跡。當時藥師寺殿の使者と有れば。何は免も有れ出合ふ筈。エ、聞へた。大方こつちの推量の通り。事にかこ付出合ぬも合點たり。コリヤやい。使者といふたは女。原鷲かすまい爲計。誠は足利直義公より嚴命。ナント肝が挫るか。其嚴命の子細といつば。去ぬる夜由良之助始め四十六人の者共。執事職の館へ押かけ。師直を討取さへ有るに。預け置れし天國の短刀。其騒動にて行方しれず。敵討は付たりにて。盜賊同然の所爲言語道斷。急度罪科有べきながら。又其節より子息師泰。討死共出奔共明白ならねば。是以て御疑ひが掛つて有るはさ。復讐徒黨の者共は。右御詮議相濟迄。桃の井若狭之助へお預け。天下に名高き天國なれば。盜取て所持もなるまい。大方は妻子が飯料。此山科の隠れ家へ。送り越たに紛れは有まい。行向つて詮議せよと。某を差越れた。サア有様に白狀せいと。地義士の所爲と天國を落し付ッしたる詞の末。地聞ぬ戸難瀬は膝立直し。詞唐天竺は申すに及ばず。此日の本の神代より。聞も及ばぬ忠臣義士。よもやとは思へ共。私ならぬお上の仰。申聞せも致さふがイヤコレ源四郎殿。エ、こな様は。どふいふ天魔が入かはつて。そんな比翼な侍には。どふして成て下さんしたぞいのふ。鎌倉と雲州とは遙の道は隔てもの。一腹一生の兄弟。死しやんした本藏殿の言しやるには。そちが兄の進道は。勇氣といひ智謀といひ。適な侍。主君の仇を報ん者。大星に續いては源四郎なりと。聞た時の其嬉しさ。夫に引かへ今日の此首尾。臆病至極の身をもつて。古傍輩の此内へ。こんな便によぶごつたのふ。いつその事最初から。斧九太夫や沖野將監達の様に。尾を振て逃たがよい。敵討の一部始終。相談事の座に連り。十の梯子の九ツ目。逃るのみか敵の餘類。藥師寺に奉公する。古今に稀なる大腰拔。地お石様や娘にも私は顔が合されぬ。詞兄と一ツでない言譯。こつちから勘當した。地斯いぶが無念なら腹切て死て下され。兄弟の好みに介錯してしんぜふと。いへ共こなたは見向もせず。板天神靨飾つた形も衣紋も引しやなぐり。喰付程に思へ共追に頭踏へたる。兄といふ字に押へられ。下さげにだにも言兼て。フシ恨み涙ぞ道理な

り。詞フ、ハ、ハ、ハ、ハ。女のざいにほざいたりな。コリヤやい。主君の敵を討てからが。腹切て死ねばならぬアツア否やの。死て花實が咲物か。生て居りやこそはし折かゝみ。兄弟廻り逢たてないか。夫は擬置拙者が役目。お石親子に逢ねば濟ぬ。劍のありかも家捜しと。地立上るをならぬ。詞最前からいふ通り。現在兄の源四郎殿に。家捜しさせては義理立ず。ヤア立ても立いても。役目を捨て歸らふか。邪魔ひろぐなど引退ても。どつこいそふはと地袴の裾。引ばるはづみにべり。切てちぎれてこなたに留り。源四郎は一間の襖くはらりと明ればコハいかに。上檀かまへし中央には亡君の御位牌。左右の脇は大星親子。其他四十餘人の面々。俗名書たるフシ有様はさながら。在すが如くなり。地未練不忠の進道も。思はずハ、ハ、ハ、ハと跡すさり。色青ざめて膝ふるひ次の一間へ逃行を。跡を慕ふて戸難瀬も俱に追。かけてこそ入にけり。地妻乞ふる。牡鹿の聲はかへろうと。紅葉踏分啼物を。フシ立歸り來ぬ妹背の。地力彌が事のみ戀こがれ。地小浪は奥より忍び出しほれながらに一間なる。靈前に手を合せ。涙さめく。歎きしが。人や見んかと娘氣の心を奥と口の間の。障子襖も。フシ指足に。地そろく戻り我夫の。位牌をそつと取下し。前に居置小聲にて。詞力彌様。久しうお目にかゝりませぬ。エ、儘ならぬ浮世の中。天にも地にもない殿御。持たといふは名計で。地玉棒の八千代迄をたつた一夜に短い別れ。けふの便りの有迄はどふぞしてお主の敵。首尾よふ討て下さんせと。詞神様や佛様を。祈る心を精力に。諦めて居ましたが。追付腹切相果る。母へ孝行願入る。思へば短い契て有たと。人に泣す事ばかり。細々書て下さんした。なんの目出度もんな事。此お文から一入に。戀しうて。どふも斯もならぬ様になつたはいなア。地こんな事ならお主の敵。討しやんせぬがましじや物。詞ア勿體ない殿様。御赦されて下されませ。憎いやつじやと舅御様も。地必呵つて下さりますな。詞其外の旁も。粹を通して下さんせ。餘まり夫を戀慕ひ。つい申したのでござります。不便な事じやとお前方は。そちら向一居て下さんせ。又我夫も我夫じや。首尾よふ敵を討課せ。欠落しては下さんせぬ。十五や六で歴々の。傳御衆と同じ様に。腹

切いでも大事な。お前計は世の人が。未練者じやと笑やせぬ。地私計が大切な。母御様も有事なりそふ無義道にはせぬがよい。詞かふいふて居る内も。若腹切はなされまいか。地そんな便りが有たなら。私しや。どふせふぞいのふく。責て道理じや尤じやと。なぜ物いふて下さんせぬ。コレ。我夫と押動かし。傍なる人にいふ如く。肌に引しめ。抱寄て。娘心のあどなくも。泣てフシかこつこそ哀なり。地勝手口より杵八が。風呂敷包せたら負ひ。一腰しやんと旅用意。小浪が手をフシ取り無理無體。地物をも言す引立てるを。振放して逃退帶際。引戻して詞コレおむす。折々おれが爰へ来るのは。疾ふから惚て居る故じや。イヤモさつきにから聞て居れは。追付腹切夫を慕ひ。あのゝ物のと獨言。可愛らしうてく。思ひが増てどふもならぬ。シタガ是よふ物を合點さつしやれ。死て仕廻ふ夫を慕ふはくはんもつに有る蠟を取ふと。がすのつん握つて居る様な物じや。じたい前髪と色事は。面白ふない物じやげな。幸ひ惚て居る此杵じや。思ひ直して女夫にならしやれ。味がのく。おふとさへ言や爰から直に。二人連てついと鎌倉。手を引合て道行じや。まだく見せる物が有ると。地風呂敷數明て取出すは。見覺えの有る尺。入装束。詞ム、こりや。是舅大星様の。サアくサ。泉州堺の天河屋で。囉ふて置た其心は。こなた衆の身の上を引掛て世話せふと。心の割符の此装束。フ、ム。そふいふこなたの本名は。ホヲ疑ひも尤と。有合尺入取上て。白地には得言ねど。歌の唱歌にありくと。我身の上を吹分て。歌此花と。浪花の事を。春告草に。しらせま。ほしや白梅の。我は野梅と。捨られて。咲夜の梅。闇はあやなし。色こそ見へね。香やは隠るゝ。花の兄。詞我は野梅と捨てられて。香やは隠るゝ。花の兄。我は野梅。香やは隠るゝ。花の兄。成程心に随ひませふ。連て退て下さんすか。そりやあたまから覺悟のまへ。サアそんな是を蕭替てと。地身拵へさすフシ折からに。地後の襦さつと明け。詞不義者見付た動くまいぞ。勲力彌が名代に。此母が去たく。地エ、と恠りかけ寄るを。突戻して。詞コレ小浪。去てしまへばあかの他人。くさり合たアノ杵八と連立て。一時も早ふ鎌倉へ。ア、夫も構はぬ事。姑去の暇のしるし。ソレ受取りやと地投やる包。心

隔の唐紙もはたとふさがる娘氣に。當惑涙。せきあへぬ。エ、詞めろく／＼と何泣事。地様子には是にと帛紗の包。解て見れば。詞路用と書し金子の包。コレ／＼。お石様にもこなたをば。鎌倉へやりたい心。此杵入が思案の通り。大星殿親子の思はく。他人が逢に遠慮はないと。心を込し暇の印。そんなら姑御にも御合點で。へエ、有難ふござりますと。地いふては拜み拜みては。跡にも心引るれど。東の空の戀しさに。先へも足の急がれて又の便りは雁の傳。其晋信を松の門打連。出んとフシする所に。詞ヤア／＼兩人何國へ行。地詮議有と源四郎。障子蹴放しつゝ立ば。戸難瀬は手鐙引そばめ。詞娘小浪が鎌倉へ出立の餞別に。大侍の進道殿。叔父御の首を土産にさすと。地突てかれゝば身をかはし。驢首擱んで柄をこぎ叩き落せばからりつと鐙は小庭へ落散たり。コレハと驚く戸難瀬が。餞。ばらりずんと切下れば。ノウ悲しやと駈寄小浪。お石もあはて轉び出。俱に舐り介抱のフシ心遣ひぞわりなけれ。詞コレ／＼御兩人。随分手負を介抱有れ。爰は我等が受取たと。地手早にかけたる玉簪。落たる鎗を追取のベヤア／＼源四郎。詞不忠未練の汝が命婆婆の暇を取せんと。地下段に構へくり出す鐙。そつくひ付にかつきと留め。詞コリヤ毛二才めが味をやる。儕も命がねぐさつたと。地てうど拂へば又付込。獅子の洞入虎亂入。互に劍術鎗術の。手練と手練が入亂れ暫しフシ勝負も見へざりしが。地運の極めか進道が。敷居に躓き漂ふ所。弓手へ通れと突留られ。うんと計にかつばと伏す。詞ホフ、適なる今の働き。殊に相手は誰有ふ。劍術無双の進道を。手の下に突留たは。義理有る母が敵討。加古川源藏行安と。知たはさつきの笛の音色。色も香も有る武士なれば。父御にかはつて勘當赦す。ハ、ハへはつと地源藏は。フシ鐙投捨て躍る。詞ヲ、嬉しいも理りぞや。過行れし夫本藏。常々の物語。小浪が兄に源藏連。男子一人有たれど。殿様御幼年の其昔。御伽役に召出され。いか成事にや御機嫌損じ。もつての外の御怒り。主命是非なく勘當せしが。御成人に隨ふて。殿にも鹿怨を悔ませ給ひ。在所方を尋れ共。地風の便りも聞へぬは。どこに狼狽居る事ぞと。涙ながらの御咄しを。聞て案じた此年月。詞よふ無事で居て下さつた。今の健氣を見るからは。

父御前の勘當は。未來てわしがよい様に。お詫を申す其代り。一時も早ふ小浪を伴ひ。力彌殿に逢して下され。まだ其上の頼には。桃の井様へ歸參して。何卒二代の本藏と。地言れて下され源藏殿。夫て先祖へ功も立つ草葉の陰の我夫も。無満足でござらふと。深手も屈せぬ教訓は。眞實眞身の親よりも。源藏が身に有餘る。詞の限り盡しても。飽たりがたき大恩と有難。涙に咽びしが。地ノウ母人。今日の只今迄御勘當の身を憚り。存じながら終に一度。御孝行も致さぬに。親父様に成かはり勘當御免下されます。御恩を送る事さへも。泣て返らぬ必死の深手。よく／＼に私めは。親に縁なき不孝者。地十二や三て勘當受し。其親人の最期も知ず。義理有る母のお前に迄。逢て別るゝ心の本意なさ。御推量下されと兄が歎けば妹も。爺様といひお前に別頼に思ふ舅君。契り初たる夫さへも。翌をも知らぬ命とは。どふした因果な産れ性。果報拙き此身やと。消入絶入泣沈む。心を察しはら／＼。涙をふきの姑も雨に打るゝ風情なり。地泣目を拂ひ源藏突立。詞かゝる歎きも源四郎。イデ首取んと地切付るを刀追取丁ど受け。詞へエエ無念口惜やなア。返り討にと思ひしに。運盡て此有様せめて最期に恨の切先受取れやつと打たる手裏劍。地目當違ふて見付の柱。はらりと掛る姿繪は。コリヤ是師泰が人相書。ム、薬師寺が京屋敷に忍び居るこそ幸なれ。術を以て天國の短刀。奪ひ取て足利家へ差上。義士の汚名を雪がれよと。心を籠し此書添へ。エ、忝いと戴く石。地源四郎は突込鐘。我と我手に鹽首握り。ぐつと一突肩口へフン穂先は朱に死てけり詞フ、ム合點行ざる叔父が行跡。大悪人共善人共。ヲ、其事を知たる者は。三千世界に夫に此石。源四郎殿の存生に。いふては却て本心に。違ふ道理と差控へし。地譯は爰にと懷中より。取出し見する夫が書狀。源藏取て押披き。詞何を追て申入候。敵師直屋敷へ夜討に入んと申合せの會合相濟。跡に残るは進道源四郎。宵より申合せし通り手配り致し候はゞ。仕損じ申事有べからず候へ共。敵ながらも高の師直いかなる妙計あらんも知れず。萬が一討洩さば。各立腹せんより外致方無之間。何卒貴殿衆にはづれ。臆病至極の名を取て敵方へ油斷させ。始終の仇を討取給へ。されば兩方全き計略。此義如何にとのつ引な

らず。密事の密事を頼みし所。元來冥理は好まぬ男。汚名を取て忠義を思ふ。日本無双の源四郎と笑ふて其場を立別れ。我は敵を討課せ名を萬天に上れ共。誠忠義の功しは進道氏に候間。此事宜しく瑞松院の後室へ。仰上られ然るべく候。お石殿へ。由良之助。そんなら叔父の進道殿は。古今獨歩の大忠臣。ヲ、此狀が極めの證文。後室様へ御覽に入んと。地詞も花の所縁有る紫野の瑞松院追加の文と名に呼はコレ大星がフシ筆跡なり。地始めて聞たる戸難瀬が仰天。詞ヤアそんなら私を切しやつたも。二人の子供を鎌倉へ品よふ遣たい心で有たか。そふいふ事とは露しらず。大悪人の腰拔のと惡口言たが恥しい。イヤ夫よりも此源藏。叔父を叔父共思はざる。天罰何と成べきと。地親子三人顔見合せ。跡に成たる諄を。數へ立て／＼詞の限り聲限りフシ涙果しはなかりける地お石は立て一間なる。君の位牌を守奉り。死骸に向つて御口うつし。詞いかに源四郎未練不忠と後代迄汚名を残すも。某が仇を報はん心ざし。至つて切なる汝が心底。あつたらしき武士を。地無實に殺す殘念やと。そゞろ涙に亡君の。位牌も諸く計なり。詞ア、ア嬉しや悦ばしや。大悪人の妹と言れて死ても是非ないに。お石様の今の計らひ。源四郎殿も此戸難瀬も。未來成佛致します。どぶぞ息有る其中に。そなた衆二人の旅立を見て死るのが此世の土産。サア／＼早ふと地勤る母。お石は涙の梵論僧笠。取て渡せば姑の。恩を戴く報謝返し未來の迷ひ暗さん爲。詞か、様のお身の上宜しく頼みまますと。地涙の雨に尺八の。歌口しめし立出れば。兼て覺悟のお石が歎き。夫や我子に言傳も名殘惜さの山々を言ぬ心のフシいぢらしき。地手負は今を知死期時。かゝ様申し母人と呼べど。答へも斷末魔。親子の縁も魂緒も切て一世のフシ憂別れハツト泣泣泣妹。俱に死骸に姫の。回向念佛や會者定離。出行足も立留り。六字の御名を笛の音に。詞南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀。鎌倉山へ旅立も戀と忠義と追善供養。見送り見返る暇乞。心殘して 三重へ出て行

下 之 卷

歌花に遊ば、祇園あたりの色揃へ。東方南方北方西方。彌陀の淨土が傘に塗立びつかりひか／＼。光り輝く姉や藝

子にいかな粹めも。現ぬかして。ぐとんどろつくどろつくや。ワイ／＼ワイドサ。調誰ぞ頼まふ頼みましよ。是は聞しい。ホヲ是れはお女中客。粹なお出立マア／＼是へ。イヤ／＼きつう取込そふなが。どれぞ座敷が。ござります共。此間から東のお客。比良大盡の居續け。大座敷はふさがつてござりますれど。亭座敷が明てござります。中居共。お茶上ませい／＼。イヤ是御亭主。かるといふ女郎が有望故同道して参つたが。アイ成程おかる様も揚詰て奥にてござります。ム、夫は幸ひ。どふぞ逢れまいかの。さればてござります。どふぞ首尾して借まして上ませふ。マアお煙草盆お盆。ドレお銚子も。地高調子。心奥には太鼓三味。調ナフ平右衛門殿。此一力は夫由良之助殿の遊び茶やと兼ては聞けど今夜が始め。今亭主が噂した。東の客とは推量が大方。左様共。道々も申した通り。必御油斷なされますな。ソリヤちつ共油斷はせぬが。マア差當つておかる女郎に。イヤ其事は亭主に今一度。そんなら爰に待て居ます。拙者は勝手に後程と。地しめし合せて平右衛門。フシ別れてこそは入にけり。調手の鳴方へ。／＼。とらまへよ。／＼。比良鬼やまだい。／＼。とらまへて抱て寝よ。／＼。コリヤとらまへたは。サア／＼酒。／＼。銚子持て。／＼。ヲ、こりや何とさしやんすへ。南無三寶こりや違ふた。御免候へたはい／＼。ヲ、氣の毒。比良様わし等は奥へ行ぞへ。女中様はにへ。歌實は心に。思ひはせいで仇な。惚た／＼の口先はいかひ。艶ては有るはいな。調終に見馴ぬ女中じやが。獨爰には何してぞ。アイ女郎を買に来ましてござんす。ハテナ。女子が女を買といふは。置ぶるしの長命丸でねつから用に立ぬ事。シテ其女郎の御假名はな。アイ。かるといふのが望てござんす。ム、あのおかるをや。アイ。扱てもきつい時花観音。身共も頃日揚詰にはして置ど。尊い所へ手もやらさぬ。彼丹波興作が歌に。江戸三界から遙々と。いつ逢しやんす事じややら。抱きしめ殺して下さんせ。地放れはやらじといふ中も。ころりと。フシ轉けて高軒。調コレ／＼申しとゆすつても。地正氣やくたい白川夜船。フシお石は傍り眺ふ中。地勝手から亭主かけ出。調申し／＼。おかる様を追付貸ます。マア夫迄は團ひの間で。始めてのお盆。地戴きましよと友治の土産。手

に持ながら案内に。フシつれてお石は奥に入る。供フシ部屋からさすつた。息をはかりに奴の雁介。詞コハ正體なき旦那の有様。地起すも人の耳近しと枕元に立寄て。嚮にかはる番脇指。鯉口ちやんと響かしても。たはひなければ。詞コリヤ油斷。大事を抱へて不用心。コレサ。く。と後から。地持起されて伸欠氣。詞雁助來たか一ツ呑めさ。イヤ酒所じやござらない。ちよつとお耳を。ム。く。何由良之助が女房。シイ。參つた様子を。出かしたく。扱は今の女が。よし。く。コリヤ雁介。そこらに忍んで。ナイ。く。地點頭奴は様の下。地奥よりざはく中居共。地サア。く。申しお出んかいな。又もり潰そといふ事か。おかるはどふじや。アイおかる様は術ない迪。小座敷に寝轉んでくござります。ドレ。く。起して酒にせふ。呑や謳へや一寸先はやくたいじや。斯醉たら梅干。茶か鹽茶か枳椇。溫飽豆腐で呑かきよと。フシ騒に紛れ入にけり。地跡へおかるはほらくと。亭主が噲菊の露。酒に浮身を任せ共任せ兼たる座敷の首尾。そつとはづして中の間へ。兄にも間の暖簾から。詞コレ申しおかるさん。お前に逢たいとおつしやる女中。揚の様子を申したりや。そんなら此文届けてくれとおこしてござんした。ヲ、いかい世話じや有たのふ。歌父よ母よと泣聲聞ば。妻に鸚鵡の。うつせし言の葉。エ、なんじやいな置しやんせ。地おかるは傍見廻して。釣燈籠の明りを照し。讀長文はお石より。始終の様子こま。く。と。女の文の跡や先。よりてはかどらず。濡の文かと比良大盡。疳癪發し亭の上。見おろす遠目讀兼るを。思ひ付たる鬚拔鏡。あり。く。移る天下一。様の下には雁助が。くり下す文月影に。透す計てひとつも。讀め無筆のフシ無念顔。地上には現の鼻毛拔。はづみにばつたり取落せば。はつと見上て隠す文。詞比良様か。おかるか。そもじはそこに何してぞ。わたしやお前にもり潰され。餘まりつらさに醉覺し。風に吹れて居るはいな。ム。はてなふ。よふ風に吹れてじやのふ。イヤ申し比良様。ちと咄したい事がござんすけれど。屋根越の天の川で爰からは言れぬ。ちよつと下て下さんせぬか。ム、咄したいとは頼みたい事かや。マアそんな物。ドレ廻つて行ふ。イエ。く。檀梯子へおりさんしたら。中居衆が見付て呑そへ。ア、どふせふなア。

ア、是々。幸ひ爰に九ツ梯子。地是を踏へておりさんせと。フシ小屋根へかくれば。詞おいは言へどどんたいが。地曲馬の梯子見るやうに。ぐはた／＼動けばちやつと引。詞イヤ此梯子は勝手が違ふて剛い様な。テモ臆病なお方では有る。お前は男じやないかいな。女子の私さへおりた事が。夫でも足がびり／＼する物。これいナア。梯子を持て居るはいなア。三間づゝまたげさんしても。足が三本有るといふのか。ア、あれ／＼。猪牙船に乗た様な。道理で舟玉様が見へるはいなア。エ、覗くない／＼。アイ髭だらけの尾花原。武藏野の月を拜み奉るじや。イヤもふそんならおりやせぬぞ。おりさんせざ下してあげよ。アレまだ悪い事を。ヲ、やかまし。丸額か何ぞの様に。地逆縁ながらと後からじつと抱しめ。抱寄られて。獅上すりにフシ唱神の。どつさり落て。詞アイタ、ゝゝ。ヲ、笑止。地怪我はないかと撫さする。君が手先がフシ打身の藥。詞申し比良様。お前は何ぞごろじやつたか。ム、いや。イヤ見やんしたて有ふ。サア何じややら面白そふな狀と見た。アノ上から皆讀んしたか。テモくだいは。ア、身の上の大事とこそは成にけり。エ、何のこつちやぞい。サア何の事とは比良様。古いが惚た。女房に持て下さんせ。置きや嘘じや。サア嘘から出た眞でなければ根が逐ぬ。おふと言んせ。／＼。イヤ言まい。なぜ。そなたのは嘘から出た眞じやない。眞から出た嘘じや。根が逐ぬ。ソリヤ何で。ヘテ此間からなぜ寝てたもらぬぞ。サイナ。それはナ。おかる受出そふ。エ、嘘でない證據に。たつた今でも身請せふ。イヤわしには。ム、間夫が有るか。イ、エ。いや有るて有る。／＼。斯言ふからは三日なり共。アイ嬉しうござんすと言して置いて笑をで。イヤ直に亭主に金渡し。今の間に埒さそふ。そんなら必違ひはないかへ。サア違ひはなけれど。ふつて／＼振付たそなた。誠が見たい。指でも切かへ。ソレよかる。サア今爰でと膝摺寄れば。地引寄て。地疑ひ深い。お方じやと。フシ兩手を肌へ抱付ば。地コリヤ堪らぬとしめ返す。氣は上つりのフシ鼻で息。詞サア指切と差添刀。地拔んとする手をちやつと押へ。詞コレ指を切るには此刀。此差添では切さぬと。地諍ふ椽先亭の上。お石は件の繪妻取出し。引合せたる面體恰好。紛ふ方なき高の師泰。おか

るは態と口舌の仕こなし。詞同じお前の其脇指。隠さんすのは氣が悪いと。地取に掛るを。詞コレおかる。心中見へた切に及ばぬ。イエ〜。勤の意地なら切ねば立ぬ。どふても望は其指添。地どつこいそふはと突飛し。詞ム、此差添を望むは曲者。合點が行ぬ様子を言へ。ヲ、いふ迄もない鹽冶の忠臣。敵の片はれ師泰殿。知たは背中其逃疵。隠す双物は尋ぬる天國。何と違ひは有まいがの。ヲ、それを知たら赦さぬと。地するりと抜打ひらりとかはし。又切付るを有合三味線。おつ取のべてはつしと請。詞親の最期を見捨るとは人てなしの猫の皮。未練比興の手の内では。誠の人は切れまいと。地拂ふ刀の花欄胸。得たりや紫檀の延棹にて。裾を拂へば飛越す早足眞向二ツと振上る。腕首ちよつと天柱のあしらひ。三筋の糸のかよはきも。思ひ切てはフシかひく。敷。後にお石が聲高々。詞大星由良之助が女房其天國の詮議に來た。比興な師泰そこ動くな。シヤちよこ才な女原。雁介參れに。ナイ〜。地かけ出る寺岡平右衛門。家來が切首引提出。詞ホ、妹出かしたお石様。雁助めは此如く首かき切たりや最早一本立。ヤア狼狽武士の侍。足利家より預つた天國の短刀迄。己と盗む重罪人。サア纏ぶつて鎌倉へ引立る。イヤ案外なる腰骨。ほてぼしさへたら手は見せぬと。地又振上る刀の下。まつかせ丁ど抜合せ。二打三打てう〜。受太刀しどろ師泰が。足首おかるが引戻す。はづみにどつさり起しも立ず。肩骨背三寸四寸。明所もなしに疵だらけ。のた打廻つて。詞ア、是申しお前方〜。地命計はお助とほへ頬するこそフシ見苦しき。地誓擲んで平右衛門ぐつと掄付連付。詞儂が様な人畜めに言聞すではなけれ共。妹おかるが相伴に。耳をさらへてよく聞け。既に去る十四日。儂が親の師直めが。首引提んと出立徒黨。松葉が谷の敵の館。忍び寄たる心の内。ヲ、應悦びでござんしよなふ。サア其時に大星様。此の寺岡を近く召れ。コレ〜平右。斯の如く取圍めば敵の首は手裡に有。其方迎も主君の仇討取たるも同然なれば。是より都へ馳登り。瑞松院の後室へ此趣を申上。我々共が妻子へも事の子細を告ぐれよと。數通の御狀受取たれ共。折角是迄仕寄た事いせめて敵の首見る迄混辭退仕たれ共。相殘る我々も残らず殉死と極めたれば。其方一人

活残り。御舍弟鹽治大助殿。御先途見届奉るが死に勝る忠義ぞと。くれぐれ重き御頼み。是非なく其場を引取た。マ心の内の本意なさはどの様に有たて有ふ。ヲ、尤じや道理でござんす。聞さへほいなふ思ふ物。サ、サ。急ぎの御狀は取受たれ共。餘り餘り残念さ。夜の引明迄うろ／＼と。外面にイミ廻りしが。武藏守師直を討取たりと呼子の笛。天に響いて聞ゆるを。思はず知ず飛上り。踊上りて我悦び。勇進んで知せの早打。都へ登つた甲斐有て。コリヤ今日といふ今日敵の片われ。此師泰めが首取のみか。ソノ天國の短刀迄取得たる我本望。地何に譬も有べきかと。悦び涙寺岡が。フシ忠義一途を顯はせり。地おかるも涙にくれながら。兄の悦び聞に付。勘平殿は三十になるやならずに死しやんして。現在お主の敵討。草葉の陰でも嘸や嘸けなりがつて居やしやんしよと。思ひ出して夫の事數へ立たるないじやくり理り。フシせめて哀なり。地お石は猶も涙聲。同此年月の憂難。四十餘人の人々は親に別れ子に放れ。一生連添ふ女房迄君傾城の勤をするも。亡君の仇を報じたさ。寢覺にも現にも御切腹の御事を。地思ひ出しては無念の涙。同左様共。足輕風情の私さへ。口惜い無念なと。月日をかぞへ指を折。御本望の其日迄。地五臟六腑を絞りしぞや。同兄様そふでござんする。私が夫も數ならねど。先立しやつたも師直故。ヲイやい。五體も一度に潰亂し。四十四の骨々も。碎る様に有たはやい。獄卒め魔王めと。地いふてはぐつしやりぐつしやぐしや。切さいなみし有様は。傍でフシ見るめも心地よし。同ホ、兄弟共に通忠義。褒美は爰にと懐中より。地取出し見せたる鳥の財布。同勘平殿の忠死を感じ。焼香の第二番と。夫の方からしらせの文。中なる金子はおかる女郎。里の苦患も亡夫の。菩提を弔ふ紫摩黄金。エ、有りがたふござりますと。地戴く中にばら／＼と藝子仲居は走り出。同叔はお前はお石様。様子は聞ておりました。由良様には前どころたんと御恩を受ました。わたしら迄が悦びますと。お文の端によい様に。地入筆頼み上ますと浮氣仲間も相應にフシ誠の道はしるやらん。地女童に劣りし師泰。同コレ／＼中居衆藝子様方。よい所へ来てくれなつた。三人の此お衆へ。地詫してたべと手を合せ。以前は高の若殿と。世に時めきし身

を持て。フシ三拜するぞ見苦しき。詞此場で殺さば言譯むつかし。酔どれの體にして。地館へ連よと羽織打着疵の口。隠れ待たる亭主の才兵衛。詞もふお歸りかと差出す手燭。ふつと吹消し。是々平右衛門殿。吞過した其客に。加茂川でナ。水ぞふすゐを上ませい。ハア。イケ。地花ならで。フシ雪のながめも桐が谷。桃の井若狭之助保明の館には。義士の面々預りてさのみ警固に及ばねど。上を憚る心から。親子兄弟引分て。間毎を隔置炬燵。和漢の軍書歌書。俳書又は畫工に言付て。席書鹿書輕書の。忠義は重き人々に。馳走は筆も及ばれず。地膳部の給仕酌取迄。侍分は窮屈と。態と女に差圖して鬱症させぬ氣抜ひ。姉共は寄こそり。詞ナントおやな殿。おつや殿。こなた衆はどふ思やる。去年から此お館へ。預けられてござるのは。きつい忠義な衆じゃげな。こちらが爲には目の正月。若いお方もたと有れど。どれも堅いお方。わしらは随分氣を付て。立居萬事にそこら傍り見せかける様にするも。忠義無双の胤なりと。残したいと思ふのに。いつぞは腹を切るのじゃげな。いとしばいてはいかないの。ア、これくおしめ殿。殿様のお心には。助命とやらいふて。残らず助けるお願ひもなされたげな。殊に館のお姫様。力彌殿にきつい惚やう。地そんな事になつたなら先へお果なされふと。フシ噂取々なる所へ。地父が名も所領も直に請繼本藏。衣服上下大小も道家老の其骨柄。禮義正しく打通れば姉共は氣味悪く。フシこそく立て入る跡へ。地館の主若狭之助。奥よりしづく歩み出。詞ホヲ、毎日の出仕太義く。父本藏が忠義といひ。歸參の大功立たる故。本知相續役義も其儘。寺岡が方より其方へ。送り越たる天國の短刀。直義公へ差上。義士の汚名をすいだ上。助命の願ひも致し置ば。今日が絶體絶命。妹千草といまだ婚禮はせざれ共。台命によつて一家の因。心よからぬ藥師寺と。評定所の對決なれば猶以て一大事。汝は随分皆共へ。心を付けて藥應べし。地萬事は歸宅と言含め。悠々としてフシ登城有る。地本藏跡を見送りて。詞陪臣ながら冥加の武士。惜ませ給ふ心から色々御心配。地某迎も。妹が縁に引るゝ有難さ。只伏拜み居たりける。姉共に誘はれ立出給ふ千草姫。フシ三五の春は。迎へても。まだ三日月の細眉は。夕暮

近き未開紅。フシ色も香も有る品形。詞コレハ／＼千草姫。殿様御登城の御留主は。義士共へのお心づかひ。御苦勞を遊ばすげな。殊に力をも入られず。彌情をかけ給ふと。姫中の取沙汰と。地力彌が事を文字割に。異見するかと千草姫。詞ヲ、恥しい本藏。そなたの妹小浪とは夫婦の縁のアノ力彌。惚た惚たふした惚何と枕がかはされふ。地まして妾は意路悪の。アノ薬師寺へ嫁入と。直義様の御上意を。背かれもせず兄様も。詞是非に及ばず一家の因そんなら主有る我身の上。地いやな夫に添ふよりこがれ死だらひよつとマア。詞思ふ殿御に添れふかと。地はかない事を願ふ氣が。其色外に顯はれて。面目ないと大名の。姫も任せぬ戀の道。フシ理りせて哀れなり。地加古川も涙にくれ姫の心を慰めんと。疊紙取出し。詞其中に籠たるは。御預けの義士共が袴に付たる金の短冊。武士の冥加を存ずる故某所望致し置。則裏はいろは假名。四十七字の合印。其假名を寄合せば。無量の戀歌も言るゝ道理。彼戀人が来りなば。お慰に事寄て。地責て心のたけ成共黃楊の小櫛と言として。フシ一間をさして入にけり。地籠鳥の雲を乞ふ。とらはれの身に有ね共。力彌は深き身の願ひ。フシ出る姿もしほ／＼と。フシ姫の御前に畏る。地姫共は爰こそと件の短冊押ならべ。目顔ですれど千草姫。恥しそふにおづ／＼と。傍へも行ず戀人の顔に見とるゝ有様は春待得たる福壽草。フシ床に飾りし如くなり。詞イヤなふ力彌殿。嘸退屈にござらふの。何がなと思へ共兄様は登城のお留主。させる事も得しませぬ。姫共が思ひ付。いろは合せの此短冊。地近ふ寄て俱々に。ならべてやいのと言つゝも。戀の角文字いろは假名。手本も上ぬ無器用さ。詞そなたに惚たとフシ寄添ば。地そつとはづして遊行袂。引留て涙ぐみ。詞聞へぬぞや力彌殿。地始めて逢た其時から。あんな殿御に添たいと。慕ふ心は鴛鴦の池を隔て住心。けふ迄言ぬ胸の中。あかす心は。そもやそも。恥しいやらつらいやら忍ぶより猶やるせなき。上々様の契話文も。別に違はぬ様々に。かぞへ立たる恨泣。フシおこぼにも又可愛らし。地力彌も岩木ならざれば御心根を思ひやり。暫し詞もなかりしが。數ならぬ私を左程に思し下さるを。いなむには有らね共。詞親にて候由良之助一ツ館に住ながら。今

日迄對面せぬも其短冊のいろは假名。取も直さず四十七人。四十七字の留り文字。横にかぞへて讀時は。とがなくて
 しす我々なれば。親子の愛執斷切心。地妹脊の結びも眞其通り。恨みと思ひ給はるなど。理り深き言譯を。聞程悲し
 き千草姫。詞切腹すると覺悟して思ひ切ても居てゝ有る。心は互に一世の別れ。無逢たいて有ふ物。地兄様の目を忍
 んでも親子の對面させませふ。其かはりにはお情に。二世の結びをしてたべと。まさかの時は詞さへ貴賤の別ちない
 じやくり。はなれ方なくフシ見へにけり。地力彌も父が顔見たさ。詞左様ならば後程迄色よいお返事首尾と首尾。地互
 に堅き約束も。心にこめし奥と口引別れてぞフシ入跡へ。地降しきる。二月の空のはだれ雪。衣に落て露華。顔を隠
 せし天蓋も着つゝ馴にしお主の館。兄本藏が案内にて。フシ櫛形の間に打通れば。地奥へ通路の鈴の綱。フシ音なふ
 聲に。千草姫。妣引連立出給ひ。詞見れば優しい薦僧修行。本藏の噂の通り笠を取ぬは宗旨の掟。苦しうない近う
 〳。コハ有がたき御詞。お預りの客人へ何がなと存ずるから。招き寄た女の薦僧。千草様の爪音に。合せたい逢たい
 と。思ふは同じ思ひなれば。憚りながらソレ〳と。地詞の中に。妣共。面白かと玉琴を。フシ姫の御前に押直せ
 ば。地障子細目に由良之助。本藏はたばこ盆お客の相伴致さふと。傍へに寄て吹きせる。煙りは富士と淺間山。フシ空
 に消行つま琴に。地逢たさ見たさ一筋に。思ふ心の竹の音も。歌我や鹿。人慕ふ身と見し夜のうつゝ。夢の通ひ路枕
 に問は。有やなしやと帶木の。園はら山の月に磨く。胸と胸とにア、辛氣競べて。同じ袖かぐみ。地秘曲も終れば
 由良之助。障子押明立出れば。思はず笠を取る小浪。舅君かと言たさ引留られて本藏が。フシ後に隠るゝ形そぶり。
 地見ても見ぬふり知ぬふり。千草姫に打向ひ。詞我々しきの賤しい者共。冥加に餘る御爪音夫さへ有るにアノ薦僧。
 山坂越て遙々と我心を慰めんと。吹て聞した竹の音色。千萬無量を心にこめ。ヲ、嬉しいぞよ悦ぶぞよ。此爪琴も笛
 竹に。飛立程にも逢たからふ。そこを逢はぬ心の覺悟。親子夫婦の愛着も。まつ此通りと地拔打に。フシ琴を二ツに
 切割たり。地姫と小浪は悲しさの。中に本藏横手を打。詞ハア、潔き御心。是に付ても去年の冬。師直館へ夜討の

首尾。地語つてお聞せ下されと。望かけられ由良之助。詞事新しき言條なれ共。君父の仇は俱不戴天。義氣鐵石とか
 ためたる。徒黨の人数は揃へ共。用心堅固の敵師直。いかどはせんと思ふ折節。過行給ひし貴殿の親父。本藏殿の厚
 志によつて。地敵地の案内知たる故。天よ川よの合詞。しめし合せし徒黨の人数。二手に別れてフシ押寄せしが。ヲ
 ヲ勇ましき其夜の手配り。地綱梯子にて塀を越へ忍び入りしと聞及ぶ。詞ヲ、夫／＼そふてござんす共。長屋／＼へ
 矢を射込。地起出る者を討とめて。猶も竊に椽側の。雨戸はづせば直に居間。爰を仕切て斯實て。我を忘れて小浪
 フシが勇。詞よくも知たり去ながら。用心厳しき高の師直。障子襖は皆尻ざし。雨戸に合栓合欄。こちては外れずかけ
 やにて。地褒たば音して用意せん。サ、其時仕様はいかに／＼。地爰ぞと姫に目くばす本藏。庭に折しも雪深く。
 さしにも強き大竹も雪の重さに。ひいわりとしわりし竹を引廻して鴨居にはめ。詞此ごとく弓を拵へ弦を張。鴨居と
 敷居にはめ置て。一度に切て放つ時は。地まつ此様にと積つたる。枝打拂へば雪ちつて。延るは直なる竹の力。鴨居
 撓んで溝はづれ障子残らずばた／＼。内には力彌が見合す顔。我夫かいのと匠寄小浪。振放して遊行を。ヤア／＼
 舐と呼とめ。詞此計略とは知たれ共。折角逢に來た小浪。御恩に預るお姫様。思ひも晴せて進ぜたさ。コリヤやい。
 何ぼ立派に言て居ても。親じやもの子じや物を。逢たふなふて何とせふ。ア、我ながら未練の敷げき。傍輩共にも蔑
 せられん。地此世の對面は限りと。見返りもせず由良之助。フシ奥深くこそ匠入たり。地跡打ながめ三人は。猶かき
 くるゝフシ胸の闇暫し。詞も泣ばかり。地小浪は涙押ぬぐひ。詞お姫様のお情で親子夫婦の暇乞。心よ相濟からは。
 わたしに遠慮は少しもいらぬ。お約束の未來の結び。早ふ叶へて上ましてと。地すゝむる詞に千草姫。詞そんならさ
 つきの一部始終。ハイ本藏殿が立聞して。地エ、恥じいと懐の。守り刀を取出して。咽にがはと突立給へば。コハ
 何事と驚く兄弟。力彌もあはて匠寄て。介抱する手に取継り。泣より外は正體も。フシ血汐に諍ふ涙なり。地下城を
 急ぐ若狭之助。戻りかゝりし此場の時宜。千草が最期も嘸有らんと。むせぶ涙を吞込て。フシ猶も子細を窺ひ聞。地手

負は苦しき聲音にて。詞ノウ小浪。そなたは知ぬと思ひの外。戀の取持して下さる其美しい心體に。地主顔して力彌殿と。何と枕が替されふ。詞悪人ながら薬師寺連言號の夫も有。若狭之助が妹は。地いたづら者じやと人の口夫てはいとしい戀人の忠臣の名も消る。詞どふても斯でも切腹と。覺悟を聞た力彌殿わしや。地極樂へ往て待ますぞや。未來の縁はコレ小浪。赦したものと手を合せ。主が家來に詫涙。扱はそふしたお心か。わたしが夫と知ながら戀を仕掛る我儘な。お姫様じやと有やうは。恨んで計をりました。夫に逢して貰ふたる義理計かりて戀の取持。其取持が柳となり。自害遊はすお前のお心。わたしは結句消たいわいなア。詞主殺しも同じ事。其かはりには未來では。ほんまにほんに情氣はせぬ。一ツ蓮て新枕。かはしてたべと伏轉び。フシ前後。不覺に見へにけり。地お主の別れに加古川も。力彌はいとど妹と脊の。二人が心を察し入。詞も涙ばかりなり。流石骨肉同胞の。妹が別れに若狭之助。隠れ家を忘れ。しづくと歩行寄。詞子細残らず皆聞たり。某今日薬師寺と。對決に及びし所。渠儼惡逆露顯の上。所領取上縛り首。其方と縁談も變約仰付られたれば。誰憚らぬ未來の契り。せめて此世の錢別ぞや。地心よふ臨終せよと。脇目に紛らす別れの涙。力彌も傍に寄添ふて。詞現世は暫し假の宿。未來は必ず夫婦ぞと。地手を取かはすが三々九度見かはす。フシ顔の色直し。地本藏立寄小浪が黒髪。根よりふつと切拂ひ。詞御恩を請しお主の菩提。尼になつたら夫はないと。地手負に渡す恩返し。今般の姫は嬉しげに。皆々さらばといふ聲も。風の吹まく春の雪散て。はかなく成にけり。跡や枕に取纏り。フシわつと計に敷き伏す。地若狭之助は悠然と。詞忠直公も皆共が忠心義臣を惜ませ給ひ。老臣學儒を召出され。和漢の舊記穿考有れども。切腹させるが後代に。彌美名日の本の國の譽れと評定極り。今日申の上刻に御上使入來の筈なれば。心靜に用意せよ。某も又一統に。右の内意を告知さん。本藏小浪兩人は。地妹が死骸佛間へと。フシ心をこめて奥に入る。地涙ながらに本藏小浪。力彌も俱に手を添て。野邊の送り有らぬ共。尼が役目の經念佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛見送る力彌も翌待ぬ。死出の用意と打連て一間へフシこそは入

にけり。地跡へ入来る禪衣の僧。義士が由縁や紫野。瑞松院と言ずして。一目にしるき其物體。斯と知せに館のあるじ。若狹之助も出席有り。詞其名は兼て聞たれ共。拜顔逐るは今が始め。思ひ寄さる御光來御用はし候かと。地挨拶有れば歡喜の眉。詞仰のごとく尊前に願ひと申すは外ならず。鹽冶の舊臣大星始め四十七人。足利殿の評定極り。今日切腹仰出され。其用意なさるよし街の風聞。愚僧は兼て惡意の間。末期の對面逐度望みと。フシ念數つまぐりおはします。詞ホフ、尤成御願ひ。早速許容申したけれど。私ならぬお預けなれば。所縁の對面叶はぬと。地詞も待す瑞松院。詞ハテ所縁とて出家の事。お赦しない逆歸らふか。地せめて大星親子にと。立て行をどこへ。詞事を分言聞すに。奥へ踏込不敵の出家。アレ引出せと下知すれば。地捕た捕たと組子の侍。追取卷たる顔見れば。大星親子千崎矢間。是はと軋る。瑞松院。若狹之助聲をかけ。詞泉州界の町人天河屋義平。義士共に對面して。嚙本望て有ふなと。地星をさされて脱はる衣。頭巾を取ば撥鬘男。頭を疊に摺付。フシ三拜してぞ悦べり。地大星義平を上座へ直し。遙下つて手をつかへ。詞某初め四十七人。亡君の仇を報ふも。貴殿の厚志に有らざれば。何條本望逐らるべき。殊に最期の今日に。遠境入來下さるとは。地宿報ならんと一禮も。詞を盡す後の櫓。さつと開けば原大鷲。吉田富堀竹森など四十餘人が一同に。詞義平殿。一別以來今生後世の對面と。地一人くくに暇乞。フシ嬉し涙の折これ有れ。詞御上使の御入と。地表に呼はる一聲は。千來萬古類ひなき。功名美名暉かす。基あなりけり忠臣の。後日嘶に書納む

明和第九壬辰歲卯月七日

作者

北 脇 素 全
中 邑 阿 契
豐 芦 州
若 竹 笛 躬

忠臣後日嘶終